

村の兄弟

小川未明

青空文庫

ある田舎に、仲のよい兄弟がありました。ある日のこと、兄は、一人で重い荷を車にのせて、それを引いて町へ出かけてゆきました。道すがら兄は、弟のことを頭の中で思っていました。

「頭のいい、やさしい、いい弟だ。俺はこうして働いても、せめて弟だけは、勉強をさせてやりたいものだ。」

などと考えていました。そして、ガタ、ガタと車をひいてきかかりますと、あちらの松の木蔭に見慣れないおじいさんが休んでいました。

おじいさんは、荷をつけた車が前にさしかかると、

「もし、もし。」といって、車を呼び止めました。

兄は、なにごとがあつて、呼び止めたのだらうと思つて、額ぎわに流れる汗をふいて、おじいさんの方を向いて立ち止まりました。

「私は、旅をするものだが、足が疲れてしまつて歩けないから、どうか、その車に乗せて町までつれていってくださいませんか。」と、おじいさんはいったのです。

兄はいつもならわけのないことだと思ひました。しかし、今日は特別に重い荷をつけ

てきたので、このうえ人間にんげんを乗せるということは難儀なんぎでした。

「私わたしの荷おもは重いのですが、この後あとから軽かるそうな荷にをつけてきた人ひとにお頼たのみくださいませんか。」と、兄あには答こたえました。

すると、そのおじいさんは、頭あたまを振りながら、

「この前まえにいった人ひとにも頼たのんだら、いま、おまえさんがいったようなことをいつて断ことわった。そういわないで乗のせてくださらないか。」と、おじいさんは頼たのみました。

兄あには、つくづくそのおじいさんを見みましたが、身体からだが小さく、あまり重おもそうでもないよ
うですから、

「そんなら、乗のせていつてあげます。そのかわり、そう早はやくは引ひかれません。」といつて、おじいさんを抱だくようにして、助たすけて、車くるまの上うへに乗のせてやりました。

おじいさんは、車くるまの上うへに乗のつてたいそう喜よろこんでいました。

「人間にんげんというものは、だれにでもしんせつにするものだ。みんなが、そう心こころがつきさえすれば、世よの中なかはいつも円まるく治おさまるのだ。」というようなことを途みちすがら、おじいさんは、車くるまの上うへで話はなをいたしました。

やがて、車くるまが町まちに入りはいりました。すると、おじいさんは、

「もう、ここでいいから降ろしておくれ。」といいました。兄は、そこで、おじいさんを抱いて降ろしてやりました。おじいさんは、兄に向つて礼をいいました。

「私は、旅から旅へまわつて歩く人間だから、べつに、お礼としておまえさんにあげる金はないが……。」といいました。

兄は、こういいかけるおじいさんの言葉をさえぎりました。

「私は、そんなものをいただく気で、あなたを車に乗せてあげたのでありません。」といいました。

「いや、ようしんせつに乗せてくださった。私はここに良薬を持っている。この薬さえぬめば、どんな病気でもなおらないことはない。この薬はどこを探したつてない。私は、支那から帰つた人にもらつたのだ、この薬をおまえさんにあげる。この薬は、もう助からないというときでなければのまないで、しまつておきなさい。」といつて、おじいさんは、一ぶくの薬を兄にくれたのであります。

ほかの品とはちがい、これをもらうとたいそう喜びました。そして、おじいさんとは町の中で別れて、自分は仕事をすまして、やがて空車を引いて、我が家へ帰つてきました。

兄が留守の間は、弟は、家において働いていました。そして、重い荷を車につけて、遠く、町まで引いていった兄の身の上をいろいろに思っていました。そこへ、兄は、帰ってきて、今日、不思議なおじいさんにあい、そのおじいさんを車に乗せて町へゆき、お礼に、いい薬をもらったことを話して聞かせたのであります。

「それほどの名薬なら、大事にして、しまっておきましょう。」と行って、二人はそれを家宝にしました。

そののち、幾月日かたつたのであります。この仲のいい兄弟は、その間、せつせと働いたのであります。

しかし、人間はすべて、いつでも達者でいるものではありません。ふと、兄が病氣にかかりました。弟は、どんなに心配したかしのれない。

「兄さん、いつかの薬を出しておのみなさいまし。」といいました。

「なに、こればかりの病氣は、じきになおってしまう。後になって、また、あの薬が必要なきがあるだろう。」と、兄は答えました。

兄の看病をしていた弟が、また、病氣にかかりました。すると、兄はねていながら、たいそう心配しました。

「俺おれの病びよう気きは軽かるいのだから、おまえこそ、あの薬くすりを出だして早はやくのんだがいい。」と、兄あにはいいました。

しかし、兄あにがのまないものを、なんで、弟おとうとがのむことがありましよう。弟おとうとは、苦くるしい中なかからも自じ分ぶんのことを忘わすれて、兄あにの身みの上うえを心しん配ぱいしました。

村むらの人ひと々びとは、この二ふた人たりの仲なかのいい兄き弟ようが、ともに病びよう気きで倒たおれていいということを知しると、どんなに気きの毒どくがつたかしれません。そして、近きん傍ぼうのいい医い者しやを幾いく人にんも呼よんでみせたり、いろうと手てをつくしてくれました。けれど、二ふた人たりの病びよう気きは、だんだん悪わるくなるばかりでした。

「どちらの、命いのちも保ほ証しょうすることはできません。」と、その医い者しやたちもいいました。

ほんとうに、こんなときに、いつかのおじいさんにもらつた薬くすりをのまなければ、のむときはないのでありました。

兄あには、弟おとうとに向むかつて、

「もう、二ふた人たりは、このままでいれば近ちかいうちに死しんでしまうだらう。しかし、あの薬くすりをのめば、助たすかるにちがいない。おまえは、俺おれよりも年としは若わかいし、また頭あたまもいい、これから勉べ強んきようをすればりつばな人にん間げんになれるのだ。そして、この世よ中なかのためにつくすことも

できるだろう。すぐれた人間が生き残つて、社会のために働くということは、けつして私事ではないのだ。どうか、おまえは、生きていて、そして、ふたたび昔のようにじようぶになつて、俺の分まで働いてもらいたい。どうか、おまえは、あの薬をのんでくれ。」といいました。

弟は、黙つていました。両方の目から涙が光つて流れました。

「兄さん、私は、死を覚悟しています。」と、ただ、それだけいったばかりでした。

ある日、弟は咽喉がかわいて、水を欲しがったときに、まだ、そのときまで気の確かだつた兄は、水の中に一粒の名薬を入れて弟に飲ませようとなりました。しかし、弟は、それを悟つて、口を開けて飲まずにしまいました。

それからまもなく、二人は、前後して、この世の中から去つてしまいました。

幾年か過ぎた、ある春ののどかな日でありました。いつか兄が車に乗せてやった不思議な老人が、この村へまわつてきました。そして、村人から兄弟の話を書いたとき、老人は感心しました。「その薬は、自分がやったのだ。」とは、口に出して、人々には語らずに、ただ、みんなに向かつて、

「人間は、ただ生きのびたからといって、たいした仕事をするものでない。この兄

弟いのように、みんなの心こころに、いつまでも忘れられない教訓きょうくんを遺のこせば、それでりっぱなものだ。」と、老人ろうじんはいいました。

村むらには、ちようど、桜さくらの花はながみごとに咲さいていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「村《むら》の兄弟《きょうだい》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年12月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

村の兄弟

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>